第２部　千曲川とナイル ── 文化の創造と継承

遺跡から見た古代千曲川の水運

川崎　保

❑はじめに

こんにちは。長野県立歴史館の川崎と申します。どうぞよろしくお願いします。

今日はナイル川の話でずっときていまして，ようやく千曲川になりました。その千曲川は先ほどの話にもありましたが，日本で一番長い川です。ただ，それでもナイル川の20分の１です。ナイル川はなんと長いのでしょうか。

その千曲川ですが，流域にお住まいの皆さんはよくご存知と思うのですが，越後つまり新潟県に入ると信濃川と名前が変わります。屋形先生のお話にもありましたが，信濃川の長さが367キロメートル，千曲川の部分が214キロメートルなので，これは長野県人の身贔屓ですが，信濃川というがほとんどは千曲川という感じを私たちはもっています。ですから今日は私が「千曲川」と言うときには，下流のふつう「信濃川」と呼ばれる部分も含んで話をしていますので，ご承知おきください。

その千曲川ですが，流域面積は約１万2000平方メートルで，全国第３位となっています。長くて流域も広い。さらに長い川だから当然なのですけど，河川勾配が緩やかで，水運に非常に向いています。実際にも古くから水運が発達してきたようです。

そして，長野県北部を流れる千曲川流域には，古代から多くの遺跡が残されていたわけです。もちろんこれらの遺跡はこれからお話しますように，千曲川との関係は当然欠かせないわけです。私が長野県埋蔵文化財センターに就職した平成元年頃から始まった，新幹線とか高速道路とか大規模な開発に伴う考古学的な調査の成果が，最近まとまってきました。今日はそういう成果を中心に，遺跡から見た千曲川の水運を考えていきたいと思います。

いつもだいたい時間が最後なくなるので，とくにこうした一回きりの講演会では，途中で終わってまた来週というわけにいきませんので，とにかくざっとあらましになりますが，最後までお話したいと思います。

❑千曲川の水運

さて，遺跡と千曲川の関係をお話する前に，千曲川の研究というのは文献の方で，大変進んできていて成果が上がってきています。たぶん今日会場に来られている地元の方には，参加された方も少なくないと思いますが，「千曲塾」の活動などがありました。

長野県は戦災にはあまりあっていないせいか，文書が残っていて，たぶんそれで，水運に関する文書もある程度あるのではないでしょうか。そして，それに関する研究も非常にさかんですね。このことだけでも非常にボリュームがあるので，時間がなくなってきてしまいそうです。とにかくそういう研究があることは知ってほしいです。そうした研究に関する本がいろいろ出版されて，私がいる長野県立歴史館にも入っているので，是非読んでみてください。

そして，私たちが取り組んでいる遺跡を発掘したりすることから分かることがあります。これらを総合して，千曲川に何が入ってきて，何が運搬されたのかということをまず考えてみたい。それからどういうことを長野県やこの地域にもたらしてくれたのか，ということを最後にまとめてみたい，と思っています。

さて，先ほど話しましたように，文献の成果だけでも非常にたくさんあって，いちいち細かく話している余裕がないので，成果から見えてきた問題点を，三つのポイントにまとめてみました。

一つ目が，中世以前というのは，これは長野県に限らないのでしょうが，水運に関する文献というのはきわめて少ない。古文書からやる水運研究はまず近世，江戸時代をやることになるようです。そしてその江戸時代の水運研究では主に二つの問題が考えられます。一つは「木流し」と言いまして，千曲川の上流のほうに，今でもそうですが，南相木，北相木や川上村といった森林が発達してよい材木の採れる山がたくさんあります。そこから木を切って，ある意味当然なのですが，切った木を馬に載せて運んでくるよりは，川に流した方がずっと楽なので，流すことになります。一本一本流すのを管（くだ）流しといいます。筏（いかだ）に組んで流すのを筏流しというそうです。これだけのことのようですが，それでもこれには技術や工夫がいるようです。ただ，流せばよいだけではなく，流した材木を引き揚げる場所が必要となり，その場所が決まってくる。これも一種の船着場的な役割をもっているわけです。

こういう場所が，松代の寺尾や犀川の丹波島などのようです。今も材木屋さんがあったり，船から見る灯篭が残っていたり，当時を偲ぶものが少しはあります。

❑通　船

ただ，実際に史跡のように残された船着場というのはあまりないようですが，場所をだいたい推定することはできます。それが二つ目のポイントである通船（つうせん）の問題です。通船の港は，図を見ていただくとわかるように，千曲川にいくつもあったようです。その歴史は，船で物資を運搬することが江戸時代の 18 世紀後半に計画されて，太左衛門（たざえもん）船とか厚連（こうれん）船といった商人が運営する船が，新潟の方から物資を運搬してくるようになりました。これが，儲かるということになりまして，松代藩が直接官営で通船をやったりしたことが知られています。

こうした通船の港で有名なのが蟹沢（かにさわ）です。現在は橋が建設されている最中で，実際の船着場の痕跡は残っていませんが，地元の教育委員会でしょうか，船着場の解説板や碑が設置してあります。碑のほうは，明治時代，島崎藤村が列車で蟹沢付近まで来て，蟹沢から船で飯山へ向かったことが「千曲川スケッチ」という作品に出てきますが，それでこの文学作品を記念して碑があるようです。

図を見ていただくと，千曲川が長いので，横にしてありますので，右下が新潟県になります。×印がついている地点は船着場があった場所です。この他にも船着場はあったようなのですが，主要なものだけ載せてあります。

下流から飯山，柳沢，栗林，先ほど話しました蟹沢，福島（ふくじま），長沼，綿内（わたうち），そして寺尾，最後が篠ノ井橋あたりにあった唐猫（からねこ）などの場所に，江戸時代船着場があったことが知られています。実際，この講演会のお話がきたときに，船着場とか実際の水運のことを少しでも知らなけりゃいけないと思い，船着場があったという場所の周辺をうろうろしてみました。まず飯山に行きまして，飯山にいったころはだいぶ雪も降っていた頃でしたが，徐々に下ってきて，講演会も近づいてきてあせりながら千曲川を遡ってきて，雪も溶けてきました。篠ノ井橋に到達したのは，先々週でした。けっこう時間がかかりました。

❑遺　跡

そうして現地を見てみて新たにいろんなことが分かってきました。こういう船着場はおそらくいろんな歴史があってできたのでしょうが，船着場の周りに私たちが発掘した古代の遺跡がけっこうあるのだなと気がついたわけです。今回は千曲川の場合のみを取り上げますが，どうもこれは他の川や地域にもありそうです。今日お話するのはそうした遺跡の中でもとくに大きな大集落と呼ばれるような遺跡で，船着場と関係しそうなものを取り上げます。

船着場といいますが，それはもっと端的にいうと水運です。こうした遺跡は水運と関係があるとも言えそうです。

最初の例が，栗林遺跡です。栗林遺跡を発掘したところ江戸時代ぐらいの船着場が出てきました。遺跡の担当者の話では，近世ぐらいのものとのことですので，通船の港でしょう。しかし，栗林に

は，多少地点は違うのかもしれませんが，もっと古くから船着場があったと思います。それはどうしてかというと，遺跡の性格から類推できることに気がつきました。

栗林遺跡も雪が降っているようなころに行きましたので，精神的に余裕があって遺跡のまわりをよく散策できましたが，本当に大集落遺跡のそのそばに近世の船着場はあったことが実感できました。これは偶然とは思えない。たしかに廃絶したのは近世かもしれないが，そのまた昔からあったのではないか，という気がしました。しかし，船着場の遺構だけからでは分からない。遺跡の内容を詳しく分析していくしかない。ですから，船着場に隣接する遺跡というものを一つ一つ見ていきましょう。

さて，この栗林遺跡を簡単に紹介しますと，縄文から弥生時代にかけての大規模な集落遺跡です。もちろん他の時期も多少はあります。縄文のなかでも，後期の水さらし場の跡が出てきました。水さらし場というのは，長さ２～３メートルほどのクリの木を組み合わせて，ちょうどプールのようなものを作ったのです。そのプールの中におそらく川が流れてきてこの中にドングリなどのアク抜きが必要な木の実を入れておいてアク抜きをする施設です。アク抜きを大規模にやっている，全国的にも珍しい遺跡です。先ほどの栗林遺跡の標識が立っていた地点あたりからは，弥生時代中期後葉の栗林式と名づけられた土器がたくさん出土しています。大城先生のおっしゃっていた考古学者が好きな土器です。私も好きですけれど，土器の標式の名前になるような有名で，豊富な資料が出土した地点です。

繰り返しになりますが，縄文や弥生の遺跡の中心地からは少し離れていますが，川原の石を敷いた江戸時代の船着場の跡が出ています。江戸時代と縄文や弥生では千曲川の位置がだいぶ違うようなので，その関係を厳密に押えることは，難しい点もあると思います。しかし，それにしても，文献や絵図で船着場の跡がだいたいわかる例はよくありますが，実際の発掘で出てくることは非常に珍しい。

次が，長野市松代の松原遺跡です。松原遺跡は高速道路で行きますと，ちょうど長野インターチェンジあたりに位置する遺跡です。ここも縄文から弥生時代にかけての大規模な集落遺跡です。縄文時代は，全国的にも有名な石製装身具が出土しています。後で触れますが，のちのヒスイ製品と似たような地域が原産地です。つまり北陸からきた装身具が出土しています。

この形が丸だったり四角だったりするのが，当時の住居の痕跡です。これら全体で集落跡と考えられています。溝が集落を巡っているようなので，あるいは環濠（かんごう）集落ではないかとも言われています。環濠集落といえば，九州の吉野ヶ里（よしのがり）遺跡や奈良の唐古・鍵（からこ・かぎ）遺跡が有名です。長野県にもこれらの遺跡のように完全に集落を巡るような形で溝があったのかは分かりませんが，集落の中に溝が入ってきているのは間違いない。こうした溝は戦争の防御用だったとも言われますが，本格的に外洋に行くような船ではなくて，小さな物資を運ぶ運搬用の小舟が通ると便利なように溝は走っています。

３番目が，だんだんこちら（戸倉）に近づいてきましたが，長野市の篠ノ井遺跡群です。この遺跡は弥生時代から平安時代に発達した大規模な集落遺跡です。これは平安時代のものですが，いろいろ面白いものが出土しています。とくに気になるものを紹介します。これは瓦塔（がとう）といって，焼物の塔です。古代の塔というと普通法隆寺の五重の塔のような木の塔を思い浮かべますが，焼物の塔も古代にはありました。こうした仏教文化と深いかかわりがある塔が集落遺跡の真中にあったようです。さて，瓦塔の下部は空洞になっていて，ここには何か入れておいたようです。何を入れておいたかは篠ノ井遺跡群では，はっきりとは分からなかったのですが，他の遺跡の例から考えて，どうも仏様が入っていた，それも塼仏（せんぶつ）という粘土を型に押し付けて焼いたものだったようです。これが入っていたとは特定できませんが，篠ノ井遺跡群からも塼仏が出土しています。

この塼仏は脇侍（わきじ）の部分だけが残っています。本来はご本尊もあって一光三尊だったようです。それを塔に安置して当時の人たちは信仰していたようです。瓦塔も塼仏も両方ともに歴史館にあるので，是非見に来てください。

こうした仏教文化に関するものは，ではどこにでもあるかというとそうではない。やはり珍しい

ものだった。瓦塔は長野県内でも50点くらいは出ているでしょうけど，埼仏は今のところ確か5点程度しかない。そのうち3点が篠ノ井遺跡群です。篠ノ井にとくに集中しているといってもよいような状況です。

それから写真の右にある字があります。これは墨書（ぼくしょ）土器といって，古代に文字が墨で書かれた食器などの土器のその文字の部分を拡大したものです。発掘当初，何の字かよく分からなかったのです。同じ字がたくさん出ていて，この遺跡の特徴を示すものだと推測されたのにです。

その後の研究で，どうも漢字の一種ではあるが，則天（そくてん）文字の一種（則天文字を変形した文字）ではないかと推測されています。則天文字というのは，中国に則天武后という歴代皇帝のなかで唯一の女性の皇帝がいたのですが，その人が創った文字です。これは今でも日本でも使われていて，水戸黄門の光圀の「圀」も則天文字です。則天文字が出たということもこの遺跡の特徴です。

4番目にこれが屋代遺跡群です。森将軍塚古墳の麓です。航空写真を見るとまさに千曲川に面した遺跡ということがわかります。この遺跡は縄文時代から平安時代の大集落遺跡です。あとで説明しますが，土器を焼いていた遺跡のようです。普通，縄文土器というのはどの遺跡でも焼いていたようになんとなくイメージされてきましたが，最近，山梨県の人たちの研究で，とくに大きな集落で土器を焼いて周辺の集落に運んでいることが分かってきました。屋代遺跡群にもこれを裏づけるような証拠がいくつかあります。また屋代遺跡群から運びだされただけではなく，屋代遺跡群には非常に遠方から土器がまとまって入ってきています。東北地方の影響を受けた土器なんかもあるようです。たまたま1個というのではなく，10個，20個という感じです。

ちなみに，屋代遺跡群は千曲川の洪水でなんども埋まったことが分かることでも有名な遺跡です。写真を見てその埋まった深さが分かるでしょうか。人間の大きさを1メートル60センチ前後として大雑把に，ここまで4メートルです。この地点が4000年前の地層なので，4000年間に4メートル，何度も洪水があって埋まったのです。これは運よく高速道路の発掘でしたので，長さ10メートルぐらいの鋼鉄製の矢板を発掘する場所の周りに打ち込んでありますので，みんなニコニコして写真に写っていられる。矢板をはずすと一気に地層は崩れてしまいますから，みんな生き埋めになってしまう。ですから矢板は取ってはいけません。私もこういう状況で毎日発掘していました。

❑遺跡と水運

さて，以上の遺跡の性格というか内容から，水運で何を運搬したのか，何が遺跡に運ばれてきたのか，考えていきたいと思います。遺跡と水運の関係を考えるうえで，本来は二つの視点が大事です。一つは千曲川を通して各地に何が運ばれていったか，つまりご当地で作られたようなもので全国に運搬されるものがあります。二つ目が千曲川を通して各地からご当地に運ばれてきたものです。両方考えねばならないわけです。

ところが，前者の場合，ご当地から各地に運ばれたものを全国各地で厳選するというのは，非常に大変です。長野県から日本列島各地に運ばれていったものの問題も非常に重要ですが，あまり時間がないので，ここでは，後者の千曲川を通して各地から運ばれてきたものについてお話したいと思います。前者の研究も非常に大切なので，ここに来られているどなたか研究していただけるとありがたいのですが……。

さて，千曲川を通して入ってきたものとは，当たり前ですが，人間が千曲川を通して入ってきました。当たり前すぎて何を言っているのかという感じでしょうが……。人間の移動といえば当然陸上を歩くのが多いのも事実ですが，その時に川沿いを移動することが当然あったようです。これは特に古い時代からあったようで，千曲川の上流，山奥の方に，北相木村栃原（とちばら）岩陰遺跡，千曲川そのものではありませんが，その水系の高山村の湯倉（ゆぐら）洞穴遺跡，おなじく千曲川の支流犀川水系になりますが，大町市の山の神遺跡といった遺跡があります。縄文時代の草創期や早期，今から大体1万年前の，川沿いにある人間の拠点のような遺跡です。

水運で何かを，丸木舟状のものを引っ張ってくることもできたでしょう。ただ，はじめは川沿いを移動のルートとして人間が歩くことによって発達したのでしょう。

次に，こうした遺跡から，人間がただ歩いてき

たということだけでなく，何らかの目的があってきたことがうかがえます。それがどういうことで分かるかというと，人間が持っていけるような海の文化を象徴しているようなものが出土しています。海産物なんかがあります。ただ，遺跡ではコンブ，イカ，タコみたいな軟らかくて腐ってしまいやすいものは分かりませんが……。千曲川流域の例ですと，先ほどの栃原岩陰遺跡では，海の貝やそれで作った装身具，ネックレス，湯倉洞穴ではサメの歯などがあります。長野市の宮崎遺跡ではサメの椎骨で作った耳飾，同じく長野市の旭町遺跡ではタカラガイ形の土製品があります。

それから，ご当地千曲市の円光坊遺跡や屋代遺跡群で出土していますヒスイもある意味，海の文化を象徴するものと私は考えています。ヒスイは，姫川という川の上流の山奥に本当は巨大な岩としてあるのですが，実際に人間が拾えるような大きさになっているのは主に日本海側の海辺，姫川の河口周辺や越中宮崎海岸などです。ヒスイもおそらく千曲川を遡って入ってきているのではないでしょうか。

人間がこうした比較的小さなものを直接運ぶ場合は，懐にいれて山を越えてくることも考えられるのですが，陸路で運びにくいものとしては，当然水運で運んだようなものがあるはずです。その可能性がきわめて高いものに材木があります。江戸時代に材木を流して運搬したことが知られていますが，江戸時代以前はどうだったのか。まだ，具体的にとくに考古学的にはその様子は分からないのですが，例えば栗林遺跡の水さらし場に使われているクリの巨木などは，遺跡の近くの里山には少なくて，やはり山奥の深山に主に生えているものです。

時間がないので，話切れないですが，集落遺跡周辺に生えているクリはどうして大きいものが少ないと予想されるかというと，最近でこそ歴史館元館長の市川先生が小布施にも大きなクリの木を残そうというので，農家の方にも大きくなってクリの実が採れなくなった木も残してもらおうということで，多少クリの大きな木が小布施などの食べるクリ産地にもありますが，本来クリの実，つまり食べるだけを考えると巨木を生やしておく必要はない。木はある程度大きくなって実が採れなくなったら伐採して，若いクリの木を中心に生やしておいた方が効率はいいわけです。ですから，まだ考古学的に積極的な証拠はありませんが，私は栗林遺跡の水さらし場で見つかっているようなクリの材木は，縄文時代にすでにおそらく水運を使って運んできているのではないかと思います。

これは，お寺とかを建築する場合も同じでしょう。善光寺の材木を水運で江戸時代運んだように，それよりずっと昔になりますが，千曲川流域の上田にある信濃国分寺の材木などの資材は水運で運んだのでしょう。

次に焼物があります。江戸時代に焼物は水運で運んだ例があることが知られています。江戸時代以前の千曲川流域の焼物といえば，中世には珠洲(すず) 焼というものがあります。珠洲というのは石川県の能登半島の先端です。今は珠洲市になっていますが，その珠洲市だけでなく，その周辺の窯で焼いているものを含めて珠洲焼です。図は鋤柄俊夫さんの論文です。図の丸は千曲川流域で出土している珠洲焼の地点です。千曲川に沿って出土しているのがよく分かります。こういうものが陸路で石川県から山を越えてきたのではなく，珠洲は能登半島の先端にありますから，直接新潟県へ船で運んでいると考えざるを得ない。こういうものが新潟のどこかへきて，さらに長野県へわざわざ新潟から陸路でくるのではなくて，当然水運を利用するようです。

もちろん千曲川には西大滝という難所がありますので，そういうところは，いったん荷を下ろして山を越えて，越えた後に舟に載せていくという工夫はしたと思いますが……。

この他，国際的な交易で手に入れた青磁白磁なども，新潟県の十日町の千曲川に面している笹山遺跡などで大量に発掘されますので，その下流にあたる長野県北部の千曲川流域の青磁白磁は水運で運ばれたものではないでしょうか。

実際，時代は下がって近世の例ですが，千曲市でも信楽（しがらき）焼の茶壷が，日本海や千曲川を使った水運で運ばれてきたと言い伝えられています。難所では一部陸路を使うことはあっても，全般的には水運が優勢だったことは近世でも言えそうです。

❑焼物の中に銭を入れて運ぶ

問題は茶壷の場合もそうですが，焼物を空っぽ

で運ぶのではなく，物を入れてくるわけです。空で運ぶのはもったいないです。もちろん今より焼物はずっと価値がありましたから，それ自体が貴重だったとは思います。ただ，具体的に何を入れたのかはまだ，よく分からない。

そのなかで，焼物に入れて運ばれたものの可能性がきわめて高いものに銭があります。昔の銭は銭形平次が使うような全体は丸いのですが，中央に四角い孔が開いています。この孔に紐を通して何枚も束ねて，何千枚としたのでしょう。千曲川水系流域の中野市，長野市，上田市，松本市で多くの焼物に入った大量の埋蔵銭が出土します。

埋蔵銭については，長野県の人は，よく知っていて，遺跡を発掘していると「銭出ますか」とよく聞かれます。本当は出ていても出ていませんと言って教えない。そう言わないか隠しておかないと，夜こっそり発掘されても困るからです。それくらいよく知られている。ところが，中世の埋蔵銭とくに室町時代以前の大量の埋蔵銭は全国どこでも出るかというとそうではない。どうもこの地域の特徴らしいのです。

私は一度，鎌倉時代の終わりぐらいから南北朝時代ぐらいの大量埋蔵銭の出土地点を調べてみたことがあります。西日本では兵庫県や徳島県からけっこう例がありました。ところが東日本では，新潟県，長野県や北海道に多いのです。これは非常に大事なことに思えました。

何でこういう地域にまとまっているか分からないのですが，少なくとも東日本の状況も銭の運搬に陸路ではなく，水運を利用していることが関係しているのだろうと思われます。

中世の銭は，奈良時代や平安時代の初めのように日本で作られたもの（皇朝十二銭）ではなく，一部の偽造銭を除けば，ほとんど中国から輸入されたものです。普通，教科書的には日宋貿易や日明貿易で，東シナ海を渡って博多，堺さらに鎌倉へ銭が大量に輸入されて，それがさらに日本国内に流通していったようなイメージがあります。それはそれで間違いないのだけれども，どうもそんな単純ではなさそうなのです。

日本海やその水系を使わないはずがない。断定してよいものやら迷うところですが，日本海の交易を調べていくうちにロシアのウラジオストックの博物館で，20センチぐらいの銀の板に不思議な文字が書かれたものを見せられました。これは何かと聞いたら，女真族の文字ということでした。なるほどと思ったのですが，私もどこかで見た覚えがあるという気がしたのです。このロシアの博物館では本来，日本の縄文時代と並行するような時期の資料を見に行ったので，この女真族の文字板は付け足しみたいな感じで，そこでは，それで終わってしまったのですが，日本に帰ってきて記憶を辿って，論文をあたってみました。

すると鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に，新潟県の寺泊に謎の異国船が漂着して，乗員がたくさん死んでしまった。ただし，数人が生き残ったようで，その乗員の持ち物が鎌倉の将軍に献上されて，そのときにやはり銀の札に不思議な文字が書いてあって，当時の学者は誰も読めなかった，という話が載っていました。このことを紹介した論文もありました。この銀の札に書かれた字が『吾妻鏡』に記載されていて，まさに私がロシアで見た女真文字と同じものでした。さらに『百錬抄』という本には，この生き残った乗員の後日談が載っていて，船が漂着した半年後，乗員たちが京都を物見遊山していたらしく，驚いた朝廷が六波羅（ろくはら）の武士に命じて，京都から追い出した，とあります。何でか知らないけれど，どこか異国の人が日本をうろちょろしているのです。単に難破したというのではなく，この背景には女真（金）との貿易的なことがあるのじゃないかと私は考えています。もちろん金という国はだんだん衰えてきたので，有力者が政治亡命したという説もあるようですが……。

ただ，私が経済的な理由を重視するのは，金王朝が発行した銭にあります。宋や明といった漢民族の王朝の銭とあまり変わりませんが，何種類か発行したことが分かっています。この金の銭が北海道，新潟そして長野県に入ってきているのですね。しかし，これをあくまで教科書的に東シナ海貿易だけでとらえようとする考えもあります。金と南宋が貿易をしていて，南宋と日本も貿易している。よって間接的に南宋を経由して，日本に金の銭が入ってくる，という考えです。

だけど，それだったらもっと九州とか西日本でも同じように金の銭が出てもよさそうなものです。こういう偏った分布を示すのは，日本海貿易があって，さらに日本海水系の水運で，銭が入ってく

ると考えなければいけないのではないか，と思っています。

❑縄文時代の水運

時間がなくなってきたので，最後にこうした状況を時代別に簡単にまとめたいと思います。

古くは，旧石器時代から川を使っていないはずはないのですけれど，私が不勉強なのと，旧石器時代は主にローム層から遺物，石器が出土するので，それ以外のものについてはあまり残っていなくてよく分かりません。丸木船のようなものが出土したというのは聞いたことがなく，水運の様子が見えてくるのは，縄文時代からでしょうか。それも6000年くらい前，縄文時代前期といいますが，丸木舟が日本列島各地で見つかっています。

この時期には，八丈島のような日本列島からは肉眼では見えない，また簡単に見つけられない島でも，縄文時代の遺跡が見つかっています。どういう遺跡があるかというと，例えば，八丈島の倉輪遺跡では，イノシシの骨が出ています。本来イノシシは八丈島にはいないから，人間が連れていったと考えられます。しかしイノシシの成獣を連れていったのではなくて，赤ちゃんみたいなイノシシを捕まえて連れていって，それをあっちで大きくして食べたのでしょうか。それから八丈島では決して採れないような石材で作られた装身具や，八丈島で焼いたとは思えない関西地方の土器が出土しています。こういうのはみんな船で運んだことはまず間違いない。外洋に出て行くくらいなので，縄文時代には当然，水運は内陸部へ発達する条件はすでに整っていたと考えられます。

問題は，日本列島内部の水運のことですが，これが意外とよく分からないことが多いのです。例えば，縄文時代には黒曜石という長野県の和田峠周辺で採れる石が，各地に流通していたことが知られていますが，その経路はなんとなく陸上ルートを想定しているのです。もちろん水運の可能性を否定しているのではないと思いますが。山を越えていくのでしょうか。和田峠は山の中にあります。陸路は当然使ったでしょう。何も根拠がないわけではありません。

黒曜石が集中して大量に見つかる遺跡というのがあります。１個や２個じゃない。穴の中にどかっと出るような遺跡というのが，台地上にあるのです。例えば，八ヶ岳山麓の駒形遺跡とか，浅間山麓，烏帽子山麓の台地上の遺跡から見つかるので，やはり台地の上を縄文人が背負子かなにかに石を入れて，運んだのではないかと考えるのは，根拠がないわけではありません。それに，今から30年ぐらい前までは，川沿いなどには遺跡は見つからなかったのです。それはどうしてかというと，さっき画像を見ましたけれど，すごく深く埋まっているから簡単に発掘できなかったということで，縄文時代の遺跡はないだろうと決めつけていたのですね。しかし，今はそういう遺跡が見つかってきたということです。

先ほどの屋代遺跡群などの例ですが，東北系の土器，海産貝，ヒスイが見つかる。こういうことを見ていきますと，縄文時代は陸路を使っているのだけど，水運もかなり発達していたのではないか。また，こうした遠隔の海から来たようなモノ以外に，陸路ではなくて水運を使ったという間接的な証拠はまだよく分からないのですが，原産地からだんだんモノが広がっていく感じではないのです。縄文時代というのは。

それはたしかに大きく見れば，黒曜石の場合，和田峠の周辺に黒曜石がとても多くて，諏訪も多くて，関東地方まで行けば，和田峠産の黒曜石は少なくなるというのはありますが，もう少し遺跡単位で細かくみると，特定の遺跡にどーんと入っているようです。ヒスイなどでも特徴的です。ヒスイは新潟にある。長野県北部にもあることはある。でも，飯山に多いかというとそうでもない。諏訪あたりに多かったりします。それも遺跡単位で見るとぽつん，ぽつんと入っているのです。こういうのは陸路でムラからムラへ手渡しでいったと考えるよりは，遠距離的な，遠距離といってもナイル川の規模からみれば近くで，当たり前という風に言われてしまうかもしれませんが，ある程度の距離があって，これに水運を利用した，そういう流通があったと思います。

弥生時代になると，どんどん水運の役割は大きくなります。これは，従来の考古学の研究からも言われていることで，溝とか田舟とかも出ています。収穫物を船に載せて運ぶということは当然考えられています。

❑古墳と水運

その次の古墳時代は，どうでしょうか。古墳時代はご当地も含まれます善光寺平に大きな前方後円墳が集中するのですね。今日は古墳の専門家の千曲市の矢島さんがいらっしゃるので，こういう古墳の話をすると，川崎がまた馬鹿なことを言っているのじゃないかなどとにらまれそうですが，私は本来，古墳時代よりもっと古いところが専門なので，思い切って言わせてもらうと，水運と関係があると思うのです。どういうことかというと，まず伝説，伝承の類ですが，千曲市の森将軍塚古墳とか中野市の高遠山古墳の麓に，だいたい隣接して小河川がある。そして，そこに舟つなぎ石とか舟着神社なんていうものが結構あるのですね。これは中小の群集墳とかじゃなくて，どうも比較的大きな前方後円墳の麓にあるようです。

それともう一つは，最初に触れました河川勾配からそういうことが言えるのではないかと思います。実は善光寺平は，とくに河川勾配が緩やかなところです。越後平野が7000分の1，これは7000メートル行ったら1メートル下がります。飯山が3900分の1，篠ノ井橋付近が1000分の1，ご当地の戸倉周辺が240分の1です。上田橋までいくと200分の1なのです。一般に通船は300分の1ぐらいが限界と言われていまして，例えば明治時代は自由に通船をやってよいとなったのですが，実際問題，戸倉とか上田あたりが限界で，佐久までいくと川の流れが速すぎて，危険でできなかったのですね。

では，どうして善光寺平に水運が発達しているからといって大きな古墳が造れたのか。それはまだ私にはよく分かりません。葺石（ふきいし）などを船で運んだってわけでもなさそうです。

しかし，古墳時代後期になりますと，上田とか佐久とか，ここから見れば上流のもっと山奥の方ですね。そういうところに古墳がたくさん造られるようになる。古墳時代後期というのはどういう時代かというと，善光寺平に古墳がたくさん造られた前期と違うのは，明らかに馬が導入された時代なのです。馬が日本列島に導入されたのは，いつかというのはまだ詳しくは分からないこともあります。古墳時代前期，森将軍塚を造っているころにも馬が一匹くらいいたかもしれませんが，陸上交通で大規模に使える状態ではなかったことは確かです。

古墳時代は牛もいたかもしれませんが，馬具がたくさん出土します。こういうものがたくさん見つかるようになると，こういう山奥というか上流の方にも古墳が造られた。たぶん，水運と陸上交通が競合するようになったと考えられます。

❑寺と水運

いろいろお話したいのですが，時間がなくなるので，次にお寺ですね。7世紀になると，だんだん古墳が造られなくなって，寺院が造られます。千曲市の「雨宮廃寺」これは屋代（おくだい）寺ではないかと言われています。川柳将軍塚の麓にある上石川廃寺，あと奈良時代に造られた上田の信濃国分寺，それになんといっても善光寺ですね。善光寺も裾花川のそばに建っています。これらはみな川のそばにあるのですが，みな水運と関係がある。それは材木を集めたり，瓦を運んだり，陸上交通では限界があるからです。

最後に，モノだけではなくて，文化的な役割も川が果たした役割は大きいのです。たとえば，お寺も材木や瓦を運んでこなくてはいけないので，便利さからお寺を川のそばに建てたのでしょうが，実は，それ以前に仏教などの外来の文化が入る導入口として，川やその港というのは非常に大きい役割を果たしています。

それはどういうことかと言うと，先ほど画像で見た篠ノ井遺跡群の中に，とくに仏教的な遺物が多かったのですが，廃寺と考えられる遺跡（上石川廃寺）も近くにあります。これは偶然ではない。『日本後紀』に，9世紀に篠井，「しののい」と読んだのか「しのい」と読んだのか読みは正確には分かりませんが，篠井という漢字の名前を「朝廷」から賜った信濃にいた高句麗系の渡来人のことが出てきます。その篠井がどこかというと，有力なのは長野市篠ノ井です。今でこそ篠ノ井は鉄道の駅前が中心のようですけど，本来は千曲川の方が篠ノ井の中心だった。朝鮮半島の渡来系の文化の気配もします。

❑猫

そこに唐猫（からねこ）という地名があります。江戸時代には船着場としても知られていたところです。この「からねこ」という地名が非常に重要

です。ここでようやくナイル川の話にもつながってきましたが，エジプトでも猫は非常に大事にされたそうです。貿易の象徴なのです。でも，日本に古代エジプト文化が入ってきたというわけじゃない。猫はどういうふうに入ってきたか，それはおそらく仏教と一緒に入ってきているのではないかと思います。今，篠ノ井で唐猫というと神社ですが，猫は仏教と深いかかわりがあります。この篠ノ井の唐猫には不思議な伝承があります。

坂城と上田の境の岩鼻あたりに大鼠がいて，これを退治するために中国から猫が連れてこられた。猫は鼠を退治はしたのだけれども，千曲川に流されて篠ノ井に流れついた。そこで，ここを唐猫ということになった，という伝承です。なんだかとりとめもない話のようですが，いろいろと示唆することがあります。

一つは水運のことを示唆しています。川は海や外国（唐）とはつながっていて，さまざまなモノが川を往き来します。そして，篠ノ井に流れ着くこともあります。

そして，唐猫といえば，鎌倉幕府の貿易港であった金沢文庫にも，仏教の経典を守った唐猫の話が伝わっています。金沢文庫は称名寺です。ここにも仏教，貿易，港，猫というセットが見られます。

つまり，唐猫という船着場周辺は古くからその地理的な条件のためか，単に物資集散の拠点というだけでなく，文化の入り口でもあったわけです。

❑おわりに

信州で，普通，交通や運送というと古代東山道とか中山道ですね。陸上交通だけが重視されがちです。もちろんこちらも重要です。そして東山道や中山道も文化的なものや物資を運んだことは間違いありません。しかし，対外的な流通や文化の流入を考えると，その移動性や量的に多く運べるという面を考えると千曲川の果たした役割は非常に大きかったのだと思います。

ご静聴ありがとうございました。

（かわさき・たもつ／長野県立歴史館専門主事）